

【講演会等報告】

中国農村出身の人類学者が見た日本農村：日中文化比較に向けて
秦兆雄氏 講演会

桑山 敬 己

開催日：2008年7月26日（土）15:00～

開催場所：北海道大学 人文・社会科学総合教育研究棟 W309 教室

講師：秦兆雄（神戸市外国語大学 准教授）

主催：日本文化人類学会

後援：北海道民族学会

講演者の秦兆雄（Qin Zhaoxiong）氏は、1962年、中国湖北省の農村に生まれた。1980年、武漢大学入学と同時に都市に移り住み、1982年に来日。都市に居住しながら日本の農村社会に強い関心を抱き、金沢大学在籍中に石川県の農村で現地調査を行った。さらに、東京大学大学院在籍中には、千葉県の農村で調査を実施した。その後、1989年から2004年まで主に中国の出身村で調査を行い、その成果をもとに『中国湖北省農村の家族・宗族・婚姻』（風響社、2005年）を出版した。2006年以降は、再び石川県、千葉県、岩手県、兵庫県などで農村調査に従事している。秦氏は「中国農村の子」としての経験を生かして、中国農民の立場から日中両国の家族・親族・宗教儀礼の研究を進めている。北海道を訪れたのは今回が初めてであった。



講師の秦兆雄氏

講演では、まず中国の農村全体について説明があった。概して、日本および欧米の人類学者は漢族と少数民族の相違を強調するが、秦氏によれば都市と農村の差もきわめて重要だという。そのことは、都市籍の「城鎮戸口」と農村籍の「農村戸口」から成る「戸口制度」という戸籍制度に表れている。農村部から都市部に移ることは就職・進学・軍隊入隊などを除くと非常に難しく、事実、秦氏自身も大学に入学を許可されてはじめて都市部に移り住んだ。同じ漢族でも、都市居住者による農民に対する差別は厳しく、むしろ少数民族のほうが国家により優遇されているという。そのため、少数民族籍を望む漢族の農民も少なくないらしい。秦氏の講演は、2008年8月8日に開会した北京オリンピックの直前に行われ、中国政府による「チベット弾圧」がマスメディアを賑わしていた頃なので、漢族で農村出身の秦氏はこの点を強調していた。

次の話題は日本と中国の農村比較であったが、20人ほどの聴衆には若い学生の姿が目立ったので、あまり専門的なことには触れず一般的な内容となった。焦点は農村生活を通して見た日中比較にあった。まず、日本の家族構造の核は、戦後の民法改正後も父と長男を結ぶ継承線にあるが——そのことはイエを継ぐ長男が本家に残り、次男以下は分家する習慣に反映されている——、中国は兄弟間の均分相続が原則であり、盛大な祖先祭祀をすることが子供全員の務めなので、中国人の目に日本人は冷酷に見えるという。また、孝の概念も日中ではかなりの差が認められ、それが両国の死生観に影響を及ぼしているという。日本で孝と言えば基本的に親

に対するものであるが、中国では(1)親、(2)祖先、(3)未来の子孫、に対して向けられている。中国人にとって父系親族の継承はほぼ絶対視されており、それは「伝宗接代」として知られる。同様の差は日中の親戚づきあいにも見られ、日本では「遠くの親戚より近くの他人」と言うが、中国では親族間の接触が頻繁に行われ、悩みごとの相談やけんかの仲裁は日常茶飯事だと秦氏は言う。事実、借金をできなければもう親戚ではない、というのが中国人の常識である。

秦氏の経験によれば、日本での農村調査は難しい。それは、日本には「沈黙は金」、「以心伝心」、「出る杭は打たれる」といった価値観があるため、人びとはただでさえ口が重いのに、調査となればよけい黙ってしまうからである。さらに、日本人は異人に対する警戒心が強いので、よそ者をなかなか家の中に入れようとしにくい。その意味で、中国人の秦氏には日本人はいつも「構えている」ように見えるらしく、概して日本の生活は「便利 (convenient)」ではあるが「気楽 (comfortable)」ではないという。反対に、中国人は議論好きで、日本語の「雨降って地固まる」を、中国語では「不打不成交」(喧嘩をしなければ仲良くなれない)という。ややステレオタイプ的な見方だが、日本で農村調査をしたことがある者なら、うなずくところがあるだろう。

日本人の「構え」との関連で、秦氏は身体の露出度の差について触れ、中国人の男は上半身裸で仕事をすることが多いのに、日本人はいつもきちんとした服装をしていると指摘した。社会階層にかかわらず、日本人は身ぎれいな格好をしているという観察は、幕末以降、日本を訪れた欧米人によってなされているが、これが時代的变化を受けにくい「国民性」や「民族性」に由来するものなのか、または「近代化」の影響で比較的早く変化するものなのかについては、議論の余地があるだろう。秦氏は前者の立場に傾いており、特に武士文化の影響について示唆したが、筆者は後者(特に急速な経済発展と都市化)の影響も無視できないと思う。たとえば、以下の写真は2008年夏に上海の街角で撮られたものである。たしかに、手前の椅子に座っている老人は下着に近い姿で、奥の数名の男も同じような格好をしている。今日の日本人からすれば「だらしない」格好だが、東京の神田に育った筆者(1955年生まれ)にとって、こうした姿は東京オリンピック以前の街の風景の一部であって、むしろ懐かしい。



上海の街角にて(2008年7月)
撮影: 桑山敬哲

日中の村落構造の違いについては、やや専門的な説明もあった。秦氏によれば、中国の農村をめぐって、第2次世界大戦中に平野義太郎と戒能通孝の間に起きた論争は、基本的に今日まで未解決とのことである。平野は「自然的生活協同態(ママ)」説を唱え、中国にも日本の自然集落に相当する村落共同体が存在すると主張した。その背景には、日中の社会的基盤の共通性を指摘して、大東亜共栄圏の構想を正当化する意図もあったと言われる。これに対して、戒能は中国の農村には日本の村落間にある境界がないこと、固定的な地域団体がないこと、村民から支持されたリーダーがないことなどを指摘して、中国には日本的な村落共同体は存在しないと主張したのである。以上の論争につ

いては、質疑応答の時間に大西秀之氏（同志社女子大学・准教授）から質問があり、活発な議論が展開された。秦氏は社会集団の構成原理に触れて、血縁関係を重視する中国と場の原理を重視する日本を比較したが、この点については『タテ社会の人間関係』をはじめとする中根千枝氏の古典的研究に詳しい。

筆者を含め、ほとんどの聴衆にとって意外だったのは、中国の人民公社制度は 1910 年代に白樺派の文人・武者小路実篤が唱えた「新しき村」をモデルにした可能性がある、という秦氏の発言であった。「新しき村」は「全世界の人間が天命を全うし各個人の内にすむ自我を完全に生長させることを理想とする」ことを目的としており（財団法人「新しき村」のホームページより）、1918 年に宮崎県に創設された。現在の本部は埼玉県入間郡にある。共同生活を財団の柱としているようだが、この「新しき村」という理想郷的な考えを、魯迅の弟である周作人が中国に紹介し、それを読んだ毛沢東が考えを温め、中華人民共和国成立後の 1958 年に人民公社を組織したという。この点については複数の識者が論じているが、中国研究が専門でない筆者には確証がないので、そのような話が講演であったということにとどめる。なお、いわゆる「共同生活」については、「新しき村」の他にも 1953 年に創設された「幸福会ヤマギシ会」が実践しており、会が謳う「一体生活」が始まったのは奇しくも人民公社と同じ 1958 年である。秦氏によれば、ヤマギシ会は河南省の南海村にある人民公社と交流があるという。

講演の最後に、秦氏は札幌入りする前に訪れた阿寒で出会ったアイヌの人びとについて触れ、「アイヌと中国の農民は相性が合う」と述べられた。講演後に真意を確かめたところ、それは民族の「本質」としての話ではなく、お互い国家統合の周辺に置かれた人間として、分かり合えることがあったという意味であった。中国国内の都市部と農村部の深い溝については冒頭で触れたが、武漢大学に入学するまで湖北省の農村で育った「中国農村の子」としての秦氏に、ふさわしい発言であったと言える。

（くわやま・たかみ／北海道大学）